

研究紀要

第30号

—設立35周年記念—

「ナイフ形石器文化終末期」集団の地域的行動
—関東・中部地方の事例研究—

尾田 譲好

殻長・殻高組成からみた関山・黒浜式期の貝塚

古谷 渉

大宮台地における諸磯式土器と浮島式土器の影響関係

中川 莉沙

縄文時代中期の環状集落と小規模集落の関係性について

松浦 誠

ヒスイ輝石岩製の磨製石斧

上野真由美

柴田 徹

西井 幸雄

麻生 敏隆

坂下 貴則

小茂田 幸

大屋 道則

埼玉県内の緑色凝灰岩と菅玉

山田 琴子

上野真由美

赤熊 浩一

小林まさ代

大屋 道則

関東地方における周溝持建物の系譜

福田 聖

埼玉県における横穴式石室の分類と編年
—無袖石室と片袖石室を対象に—

青木 弘

北武藏児玉地域における内斜口縁环の編年的位置づけ

山本 良太

盾持有人埴輪頭部の分類と変遷について

長谷川啓子

鉄鎌からみた「征矢」と「野矢」についての予察
—埼玉県内における古代遺跡からの出土事例を中心に—

渡邊理伊知

古代寺院における食堂院の構造
—平城京遷都後の官寺を中心に—

香川 将慶

2016

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目 次

序

- 「ナイフ形石器文化終末期」集団の地域的行動 尾田 譲好 (1)
—関東・中部地方の事例研究—
- 殻長・殻高組成からみた関山・黒浜式期の貝塚 古谷 渉 (19)
- 大宮台地における諸磯式土器と浮島式土器の影響関係 中川 莉沙 (37)
- 縄文時代中期の環状集落と小規模集落の関係性について 松浦 誠 (57)
- ヒスイ輝石岩製の磨製石斧 上野真由美
柴田 徹
西井 幸雄
麻生 敏隆
坂下 貴則
小茂田 幹
大屋 道則 (69)
- 埼玉県内の緑色凝灰岩と管玉 山田 琴子
上野真由美
赤熊 浩一
小林まさ代
大屋 道則 (79)
- 関東地方における周溝持建物の系譜 福田 聖 (87)
- 埼玉県における横穴式石室の分類と編年 青木 弘 (107)
—無袖石室と片袖石室を対象に—
- 北武藏児玉地域における内斜口縁環の編年的位置づけ 山本 良太 (135)
- 盾持人埴輪頭部の分類と変遷について 長谷川啓子 (149)
- 鉄鎌からみた「征矢」と「野矢」についての予察 渡邊理伊知 (163)
—埼玉県内における古代遺跡からの出土事例を中心に—
- 古代寺院における食堂院の構造 香川 将慶 (181)
—平城京遷都後の官寺を中心に—

大宮台地における諸磯式土器と浮島式土器の影響関係

中川 莉沙

要旨 本論は、大宮台地における縄文時代前期後半に位置する諸磯式土器と浮島式土器の影響関係と、その社会背景について検討するものである。比較対象として、武藏野台地と下総台地から遺跡を選び出し、浅鉢を中心的に分析した。

その結果、大宮台地上では諸磯式土器が主体となっており、諸磯式期の中でも初段階に最も栄えていたことが確認できた。また、諸磯式では漆を、浮島式ではベンガラを主に使用するという赤彩方法の違いが再確認できた。その一方で、浮島式の初期段階では諸磯式の浅鉢を使用していることや、浅鉢と共に块状耳飾りや深鉢の大形片なども土壌へ副葬する墓制の共通も判明した。浮島式土器は諸磯式土器の影響を受けつつ独自の文化を発展させていったことを再確認できた。

はじめに

諸磯式土器と浮島式土器の研究史や現在の問題点を整理すると、二つの型式の影響関係、土器の使用方法や出土状況など両者の文化の違いや社会背景についての研究は深められていないことが分かる。そこで大宮台地での出土例を対象に、諸磯式土器と浮島式土器の影響関係を精査した。相互の影響関係を見極め、狭い範囲に限ることで当時の社会背景や生活の想定に適用できるかを検証したい。一部で分布が重なり合う両型式を対比することで、最終的には両者が交錯する大宮台地という特定の範囲における縄文時代前期の社会背景や地域性の解明を目的とした。

1. 研究史と問題点の整理

諸磯式土器と浮島式土器は、1894年に茨城県浮島貝ヶ窪貝塚の記録が初出である。1897年には八木奘三郎が諸磯遺跡の十器を紹介した際に、両遺跡の出土土器の類似性に着目し、遺跡間で交流があった可能性を示している。1920年になると、松本彦七郎が宝ヶ峯・里浜貝塚などで層位学的発掘を行い、この期の土器の新旧を定めている。

その後、柳原政職や山内清男によって諸磯式の分析や編年が行われ、山内は1930年に諸磯式を編年表の中に明記した。浮島式は、1950年代に江坂輝彌や西村正衛によって提唱され、その後興津貝塚や旧東練兵場貝塚等の発掘により、後続する興津式が加えられた。

1970年代以降、諸磯式・浮島式の前後型式や細分に関しての問題が多く述べられた。(和田 1973、今村 1982、鈴木徳雄 1989、今橋 1991)。

その後、1990年代以降になると狭い地域における型式間の影響関係や文化、文様の細かな変化に着目して地域性を考えるもの、型式のさらなる細分化や編年の見直し等の問題が浮上した(今橋 1991、松田 1993・1995、細田 1996・2002、今村 2000、和田 2006、関根 2008)。

編年が整い、細別もあらかじめ進んだ現在では、細別間の関係や地域性についての研究は進められているが、文化的な動向を把握するために敢えて範囲を限定した研究は未だ多くない。

そこで本論では、挙げられている問題の中から諸磯式と浮島式の影響関係や地域性を元に、当

の文化的な動向の一端について考察する。

2. 分析方法

特に参考にした研究として、今村啓爾の「称名寺式土器の研究」(今村 1977)、松田光太郎の「諸磯・浮島式土器の変遷と型式間の影響関係」(松田 2008a)を挙げる。今村論文は編年を再構成する上で分析方法を参考にし、松田の論考は折衷土器の分析方法や諸磯式土器と浮島式土器の編年を参考にした。

分析対象の遺跡は関東地方から選出した。主題とした大宮台地、地域性を明らかにするための比較対象として浮島式土器が多く出土する下総台地と、諸磯式土器が多く出土する武藏野台地の隣接する二台地を加え、各台地から 12 遺跡ずつを選出した(図1・表1)。武藏野台地に関しては、武藏野台地に隣接する多摩丘陵からも諸磯式土器・浮島式土器の良好な資料が出土するため、分析対象に含めている。

資料を分析する上で使用する共通の視点は、文様・器形・地文・文様要素で、分析の対象とする型式は、諸磯 a 式・b 式(古)・b 式(中)・b 式

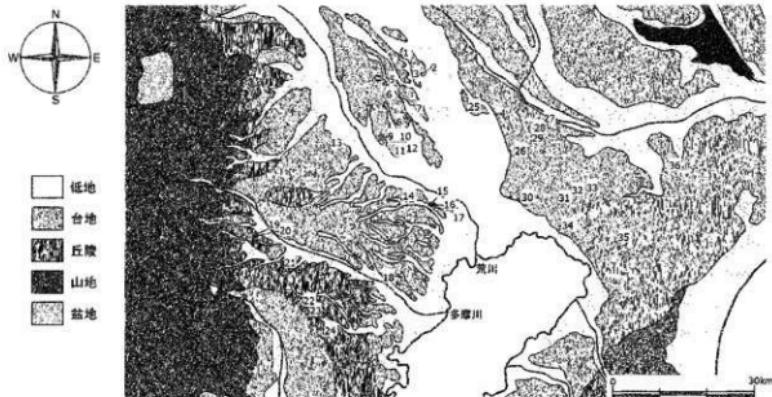
(新)・c 式、浮島 I 式・II 式・III 式・興津 I 式・II 式である。

地域間の交渉を類推できる格好の資料となる浅鉢は、出土場所・出土状況・共伴遺物・赤彩痕を重複する属性とし、上記の共通の視点に付加して用いる。折衷土器は出土数が少ないので共通の視点で分析した上でどちらの文様・器形をどう取り入れているかを見るにとどめ、ここでは浅鉢を中心に取り扱う。

共通の視点を用いて各型式を整理し、先行研究を参考にして対象地域における編年を再構成を行う。そして編年を再構成する中で得た各遺跡の特徴を台地ごとにまとめて比較する。隣接地域との影響関係・文化の違いや共通点を明らかにし、大宮台地における地域性や縄文時代前期後半の社会背景を解明する足がかりとする。

3. 編年の再構築

本論における浅鉢を中心とした編年は、松田 1993・1997・2008a、今村 1982、鈴木徳雄 1979、小杉康 1985 の論文を参考にしてまとめているが、主に松田による諸磯式・浮島式土器の



第1図 分析対象遺跡分布図(佐々木 1993 を改変)

第1表 台地別分析対象遺跡（筆者作成）

大宮台地	武藏野台地	下総台地
1.足利遺跡	13 鷺森遺跡	25 米島貝塚
2.前原遺跡	14 中台馬場崎貝塚	26 長崎遺跡
3.タカラ山遺跡	15 七社神社前遺跡(Ⅰ)A地点・B地点	27 花前Ⅰ遺跡
4.諏訪山貝塚	16 七社神社前遺跡(Ⅱ)	28 花前Ⅱ-2遺跡
5.大針貝塚	17 七社神社前遺跡(鑿)	29 矢船遺跡
6.丸ヶ崎遺跡	18 稲荷丸北遺跡(Ⅲ)	30 上台貝塚
7.浮谷貝塚	19 宇津不合遺跡	31 五本松遺跡
8.中川貝塚	20 宇津木台遺跡	32 御山谷遺跡
9.北宿遺跡	21 多摩ニュータウン遺跡No.753	33 一本桜遺跡
10.宮本遺跡	22 小山田遺跡群Ⅱ No.12	34 版山満東遺跡
11.大谷場遺跡	23 小山田遺跡群V No.20	35 和良比遺跡
12.大谷口向原東遺跡	24 本町田遺跡	36 加定地遺跡

編年案を参考にしている。まずは松田編年を中心
に他論とまとめ、再構成して対象地域における諸
儀式・浮島式土器の編年案を示す。

松田は各型式を細分して変遷をたどるうえで器
形・文様要素・文様・地文を共通の視点として分
析し、地域差があるものに関してはそれについて
も言及している。

3-1. 諸儀式土器の編年（第2図）

◇諸儀 a式（古）（関東地方西部）

器形：口縁部は内湾、外反、直立するものがあり、平縁と波状口縁（4単位）がある。口縁が外反するものは胴部中位の張り出しが強く、直立するものは円筒形の器形となることが多い。口唇部に刻みを加えるものもある。

文様要素：幅3～5mm程度の幅狭爪形文・平行沈線文・櫛齒文・円形竹管文があり、これらによつて横位区画が施文される。

文様：上記の区画内に米字文・肋骨文等の縦位区画を其軸とする文様を描く。肋骨文の各縦位区画間を三角形ないしは弧線で連結するものが出現する。

地文：節の細かい縞文を施文する。

◇諸儀 a式（新）

器形：口縁部は外反し、口唇部は素文が多い。外反するものは長脚化し、胴下半に膨らみをもつものがある。平縁と波状口縁（4単位）がある。

文様要素：幅狭爪形文・平行沈線文・櫛齒文があり、これらによって横位区画がなされる。また円形竹管文、刻み付隆線もある。

文様：上記の区画内に同一幅の文様要素で肋骨文や波状文、縦位区画の崩れた（タテ区画の崩壊）入組木葉文・分離木葉文などを施文する。口縁部直下や胴部に刻み付隆線をもつものもある。この段階の指標は木葉文が向かい合って構成されることだと認識されている。他にも磨消絆文を合わせても例が多い。米字文がやや崩れたもの、短冊文や肋骨文・木葉文が共存する段階と、米字文が消滅する段階がある。

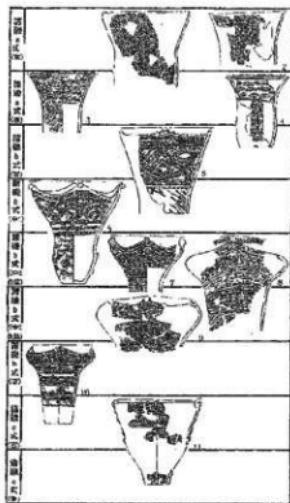
地文：節の細かい縞文を施文する。

◇諸儀 b式（古）

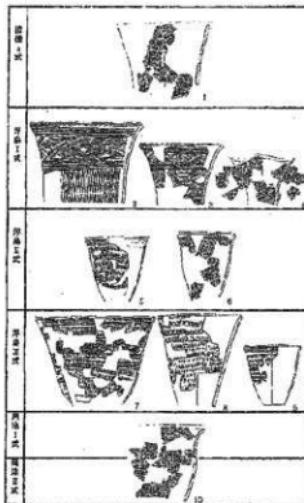
器形：口縁部は外反し、平縁と波状口縁がある。2単位波状口縁が出現し、尖頭状の波頂部が見られなくなる。

文様要素：幅6～7mm以上の幅広爪形文や平行沈線文があり、これらによって横位区画がなされる。また刻み付の隆線がある。

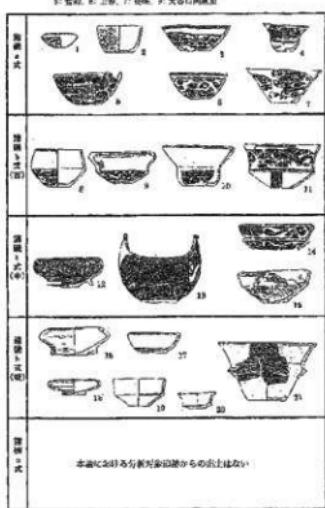
文様：上記の区画内に同じ幅の文様要素で入組木葉文が変化した藤手文や横位弧線文、菱形文などを描く。口唇部には刻み、凹み、隆線をもつものが少量存在する。口縁部直下および胴部に刻み付の隆線を貼ることもある。爪形文間に斜め刻みが施文される。横位弧線文はその内部に木葉文や縦位沈線を加えたり、横位入組弧線文に変化し



浮島式土器の編年
1: 七折神井型、2-4: 球根コマリ型 M.752, 5: 茶山彫刻、
6: 黒波、7: 上波、7: 白波、8-12: 大谷山彫刻



浮島式土器の編年
1-4: 白字波、5: 黑波、6: 白波、7-9: 白波、10: 黑波



浮島式土器の遺物編年
1: 大谷波、2-10: 茶山彫刻、3-5: 9c-12c(4-6c: 七孔神井型、
11: 白字水波、12: 黑波、20: 茶山波、21: 白波大谷)



浮島式土器の遺物編年
1-4: 茶山彫刻、7-12: 茶山波
本縄における分野対象遺物からの出土はない

第2図 諸縄式土器と浮島式土器の編年（筆者作成）

たりする。

地文：縄文を施文する。

・浮島I a（新）～I b式に平行する。

◇諸磯b式（中1）

器形：口縁部は外反に加え、内湾口縁が現れる。平縁と波状口縁（2単位・4単位）がある。波頂部の獸面把手が盛行する。

文様要素：爪形文・平行沈線文・浮線文があり、これらによって横位区画がなされる。

文様：上記の区画内には前段階の文様に加えてル字彫手文や渦巻文を描く。口唇部には刻み・凹み・降線をもつものがある。爪形文間に斜め刻みがあり、浮線文上に刻みや縄文を施文する。平行沈線文は幅が狭まる。

地文：縄文があるが、筋が粗くなる。

・浮島I b式に平行し、また諸磯b式全体に北白川下層II c式が平行する。

◇諸磯b式（中2前葉）

器形：口縁部は内湾口縁が多く、平縁と波状口縁（4単位）がある。波頂部に獸面把手や円柱状貼付文が付く。浅鉢は、口縁部に凹孔が巡る内湾浅鉢・複段内湾浅鉢が主流になる。

文様要素：浮線文・平行沈線文があり、それによって横位区画がなされる。爪形文は基本的に消滅する。

文様：上記の区画内には多重渦巻文・菱形文・網目状文が描かれ、口唇部の刻み・凹みは減少する。

地文：縄文が施文される。

地域差：関東地方南部では浮線文が少なく、沈線文が多い。また撚りの粗い縄文・貝殻背庄文・爪形刺突文をもつなどの地域性が顕在化する。

・浮島II式に平行する。

◇諸磯b式（中2後葉）

器形：口縁は内湾口縁・内折口縁が多く、波状口縁（4単位）が増加する。波頂部に獸面把手が退化した円形貼付文が付く。波頂部が高いものが

現れ、頸部に三角形の施文域が出現する。

文様要素：平行沈線文や浮線文があり、それによって横位区画がなされる。

文様：低平化して鋭い刻みや列点文などが付いた浮線文や平行沈線文によって描かれる横位区画内に、渦巻文・風車状渦巻文などが施文される。沈線文による菱形文や網目状文もある。

地文：縄文を施文する。

地域差：関東地方南部の地域差は存続。

・浮島III式に平行する。

◇諸磯b式（新）

器形：内折口縁が多く、ほとんどが波状口縁を呈する。波頂部は一層高いものが出現し、円形貼付文がつく。

文様要素：浮線文が消滅し、残った幅の狭い平行沈線文によって横位区画がなされる。

文様：上記の区画内に風車状渦巻文や網目状文などを描く。

地文：縄文をもつが沈線文の多段化に伴って文様の下地に隠れてしまい、溝在化する。

地域差：関東地方北部では、最終末に湾入口縁と幅狭の4単位縦位区画が出現する。関東地方南部の地域差は、文様が沈線文に統一されるため弱まるが、撚りの粗い縄文などはある。

・興津I式に平行する。

◇諸磯c式（古）

器形：口縁部は外反するもの、外湾するもの、外反し内面が肥厚するものなどがある。

文様要素：集合沈線文・貼付文・沈線文があり、集合沈線文によって横位区画や4単位縦位区画がなされる。

文様：上記の区画内（胴部）に、縦位レンズ文や矢羽根状文を描く。沈線文の幅が一層狭くなる。横位矢羽根状文の上器（横位沈線文上器）もあるが、口縁部形態や突起などで諸磯b式と区別できることが多い。

地文：縄文が少量ある。

地域差：関東地方北部では、口縁部に4単位棒状突起をもつ段階は突起が沈線施文前に貼付され、口縁部に多単位の突起をもつ段階は棒状突起が沈線施文後に貼付される。また関東地方南部では、口縁部に4単位棒状突起をもつ段階は縦位文様が無く、横位集合沈線文上器が主流となり、口縁部に多単位の突起をもつ段階は縦位文様を持つようになる。

・興津II式に平行する。

◇諸磯c式（新）

器形：口縁部は平縁で、内湾するもの・外反して内面が肥厚するものがあるが、まれに内折するものもある。

文様要素：集合沈線文や貼付文があり、集合沈線文は口縁部に横位施文し、胴部に縦位文様を描く。

文様：口頭部に横線文または横位矢羽根状文が配される。胴部の縦位4単位区画が崩れ、縦位レンズ状文や菱形文などが描かれる。また、口縁部・頸部に多単位の棒状突起・貝殻状突起をもつ段階や口頭部の幅が広がって棒状貼付文が加えられる段階がある。

地文：ごく一部にのみ繩文が存在する。

地域差：関東地方南部には条線文上器（条線地結節浮線文上器）が存在する。

・興津II式に平行する。

3-2. 浮島式土器の編年（第2回）

◇諸磯a式（古）（関東地方東部）

器形：口縁部の内湾、外反があり、平縁と波状口縁（4単位）がある。

文様要素：幅（3）4～5mm程度の爪形文・平行沈線文・櫛齒文があり、それらによって横位区画がなされる。

文様：米字文の無文帯が未発達な傾向があること以外は関東地方西部とあまり変わらない。

地文：繩文の中に縦走繩文を含むという特徴が

ある。また、撚糸文が施される。

◇浮島Ia式

器形：口縁部は外反するものが多く、平縁と波状口縁（4単位）がある。波頂部には突起がつくことがある。

文様要素：幅4～6mm程度の爪形文・有節平行線文・平行沈線文・櫛齒文があり、それらによって横位区画がなされる。

文様：上記の区画内に、同一幅の文様要素で肋骨文や縦位区画の崩れた分離木葉文・流水文などの文様を描く。口部は素文が多く、口縁部直下や胴部に刻み付の降線をもつものがある。また波状文があり、D字爪形刺突を垂下させたものが多い。

地文：附加条・撚糸文・縦位沈線文・貝殻腹縁文などを施す。

◇浮島Ib式

器形：口縁部は外反し、平縁と波状口縁（4単位）がある。

文様要素：幅6～8mmの変形爪形文・爪形文・有段平行線文・平行沈線文があり、それらによって横位区画がなされる。また貝殻文も存在する。

文様：上記の区画内に、同一幅の文様要素で弧線文・鋸齒状文・菱形文が描かれる。口唇部は素文が多いが、指頭凹み・竹管刺突・ハの字状刻みが少量存在する。降線が変化した低降起帯（横長刺突または爪形文がつく）が口縁部下と胴部に巡るものがある。

地文：撚糸文や稚拙な波状貝殻文をもつ。これは貝殻を器面に垂直気味に当てて施した繊細な貝殻文で、主にアナダラ属の貝殻が使用される。

◇浮島II式

器形：口縁部が外反し、平縁と波状口縁（4単位）がある。

文様要素：幅10mm前後を主とする変形爪形文があり、これによって横位区画がなされる。また凹凸文もある。

文様：上記の区画内に、幅3～4mmの幅狭平行沈線文で菱形文などを描く。口唇部は素文が多く、竹管を刺突したもの・ハの字状や粗い斜め刻みなどの条線文粗型と思われるものが少量存在する。変形爪形文間に横長刺突・垂直刺突・斜め刻みなどが施文される。輪積痕上には指頭凹みをつけた凹凸文が出現し、貝殻文などに併用される。

地文：ハマグリやアナダラ属貝殻の背を器面に向けて施文した幅広いサ痕で、胸部下半に施文される。

◇浮島Ⅲ式

器形：口縁部は外反し、口唇部は外削状をなす。平縁と波状口縁（4単位）があるが、平縁のほうが多い。

文様要素：三角文や幅10～15mm程度の変形爪形文・爪形文があり、それらによって横位区画がなされる。また凹凸文や三角文がある。

文様：上記の区画内に、幅3～4mmの幅狭平行沈線文で矢羽根状文・菱形文・横線文などを描く。三角文は腹縁を欠損させた貝殻や抉り入り半截竹管で描かれたと考えられている。貝殻文は背を器面に傾けて施文したものが多く、アナダラ属貝殻を用いると、貝殻の放射肋が集合沈線文のように表出される。凹凸文は貝殻文のほか、平行沈線文とも併用される。口唇部に条線帯をもつ。

地文：貝殻文が施文される。

◇興津Ⅰ式

器形：口縁部が外反し、ほとんどが平縁である。口唇部は扁平である。

文様要素：幅広右筋平行沈線文・幅3～4mmの幅狭爪形文があり、これによって横位区画がなされる。また密接凹凸文もある。

文様：上記の区画内に、幅狭爪形文・平行沈線文で菱形文や横線文などの文様を描く。口唇部に縦位条線帯があり、整った縦位条線文を配したものが多い。三角文は残存する。凹凸文は竹管による密接凹凸文になり、貝殻文土器やそれ以外の有

文土器に併用される。

地文：貝殻文を施文する。

◇興津Ⅱ式

器形：口縁部は外反し、平縁と波状口縁がある。口唇部は肥厚するものや、細くとがるものなどが存在する。台付鉢も出現する。

文様要素：三角文・条文・凹文・平行沈線文がある。凹文は凹凸文が平坦な器面につけられたことで変化したものであり、有文土器や貝殻文土器に併用される。

文様：縦文が出現するが、単節縦文が基本である。羽状縦文が施文されることもあり、口唇部施文をもつものや鋸齒状に粘土を貼り付けるものもある。また菱形文が存在する。菱形文がやや大きく、縦位に1～2段ほど描かれ、菱形文の中に弧線文や円文、横位に連繋する横位レンズ状文が充填されるものは諸磯c式（↓）に平行する。菱形文がやや小さく、縦位に3段ほど描かれるなど段化したり、大柄の横位レンズ状文が横位に連繋して描かれたり、鋸齒状文が描かれたりするものは諸磯c式（新）に平行すると考えられている。

地文：貝殻文や縦文が施文される。

統いて上記にまとめた編年を踏まえ、松田2007b・2008a、谷口康浩1989、金井正三1979、谷井彪！1972の諸論を参考とし、筆者が設定した共通の観点を用いて浅鉢のみの編年を構成する。

3—3. 諸磯式土器の浅鉢編年（第2図）

◇諸磯a式

器形：口縁部が内湾、外反する。どんぶりのような鉢形と比較的浅い浅鉢形のものが存在。底部から胸部にかけて内湾気味に直立する段階と、胸部下半でくの字状に内側へ向かって屈曲して算盤玉のような形状を呈する段階がある。他に、口縁

が若干すぼまって球形を呈する段階がある。

文様要素：爪形文・平行沈線文・櫛齒文・刺突文・無文がある。

文様：上記の文様要素によって口縁部に文様帯が形成され、爪形文列や平行沈線文と刺突文を組み合わせた列が2条描かれる。その間には3条の波状沈線文や磨り消された爪形文が充填される。文様帯の付近に、少し間隔をあけるようにして孔が2ヶ所認められるものがある。算盤玉状のものは、屈曲部より上部は無文、それより下部は斜繩文を施文するものが多い。無文部には半截竹管を使用した平行沈線文及び爪形文による弧状の文様が描かれることがあるが、この文様を器面全体に施文するものもある。また、器面一面に斜繩文のみを施文する例も存在する。球形土器は屈曲部より下の胴部上部あたりで平行沈線文によって上下に区画され、それより上部には入組木葉文が施文され、それより下部には繩文が施文される。

地文：単節斜繩文が施文される。

◇諸磯b式（古）

器形：口縁部は外反、内湾するが、外反するものが多い。胴部でくの字状に内側へ向かって屈曲する部分から上部にかけて、やや大きく外反する。屈曲部より下部がかすかにふくらむものもある。口唇部が内折する段階がある。また口縁部が内湾して壺形を呈し、底部を取り巻くように高台上の突帶がつけられる器形もある。また、人型化する。

文様要素：無文・斜繩文・浮線文がある。

文様：屈曲部より下部には斜繩文が施文され、屈曲部より上部は無文であり、丁寧な研磨が施されることがある。また、180°毎に焼成前に開けたと思われる小孔があるものがある。口縁部内側の一部に、赤色顔料が帯状に塗布されたものも存在する。壺形土器の口縁部・胴部・底部に刻み付の浮線文が貼り付けられ、周りには口縁を開むように等間隔で小孔があけられる。

地文：単節斜繩文が施文される。

・浮島I式に併行する。

◇諸磯b式（中）

器形：算盤玉を演じたような器形になり、多段化する。底部には高台上の突帶のなごりと思われる陵ができる、胴部下半は若干ふくらむ。胴部上半は屈曲して横へ張り出し、口縁部は壺形土器のよう少しすぼまり、軽く立ち上がる。胴部上半と下半の境目が微妙にくびれるものも存在する。またボウル状の土器もある。

文様要素：刺突文・沈線文がある。

文様：半截竹管による単沈線と爪形文状刺突によって入組木葉文が描かれ、胴部中間部分にある無文帯によって文様が上下に区画される。浮線文の名残として口縁部・胴部・底部の屈曲部に半隆線や形態的な刻み目が残されている。また、前段階同様に小孔があけられる。木葉文が伴う磨消繩文の部分には焼成後赤彩が施されることがある。

地文：繩文が施文されるが、無文の場合もある。

・浮島II式に併行する。

◇諸磯b式（新）

器形：内湾するものや、上面が平坦な複数内湾浅鉢が存在する。底部にわずかな立ち上がりを持ち、粘土紐を貼り付けて高台状にしたものもある。胴部中程よりやや上に最大径を有し、くの字状に内湾する。また独楽のような形となる器形もあり、口縁部が直角に近い角度で内傾する。

文様要素：無文や浮線文がある。

文様：器面から一切の文様が消えて無文土器となるが、口唇部にのみ斜行する刻み日のついたソーメン状の粘土紐を2条貼り付けるものも存在する。この特徴は群馬県から出土した浅鉢にもよくみられる。また、胴部下半に刻み日をもつ隆帯や粘土紐をもつものもある。この口唇部に粘土紐を有する土器は、粘土紐に沿って焼成前にあけられた小孔が一周する。この口縁部を一周する小孔は前段階から続くもので、粘土紐をもたない上

器にも同様にあけられている。無文部はよく研磨される。無文部には、本末赤彩で渦巻文等が施文されていたのではないかと考えられている。

地文：なし。

・浮島Ⅲ式と興津Ⅰ式に併行する。

◇諸職c式

器形：前段階同様、内湾浅鉢や複段内湾浅鉢が存在する。複段内湾浅鉢は前段階の傾向を強めて口縁部の平坦面が肩より突出し、口縁部が立ち上がって鈞に変化する。かつての屈曲部もこの鈞元に集約されてしまう。また独楽のような形を呈する上器の系列だと考えられる、胴部が丸くふくらむものもある。この土器は底部に高台状の隆起をもつ。

文様要素：無文である。

文様：前段階同様、口縁部・突出部に孔を有するものがある。

地文：ない。

・興津Ⅱ式に併行する。

・この時期の資料は少なく、他にも器形や特徴があると考えられる。

3—4. 浮島式土器の浅鉢編年（第2図）

◇浮島Ⅰ式

この時期、浮島式文化圏では諸職式土器の浅鉢を使用する例が多く、今回選出した遺跡からは浮島Ⅰ式であると言える特徴をもつ資料は出土していない。しかし、深鉢を主とした編年・細分では一段階として細分することを考慮して、浅鉢を主体とするこの編年でも区分する。

◇浮島Ⅱ式

器形：杯形土器と呼ばれる鉢が存在する。底部が若干立ち上がり、そこから角度を少しつけて胴部が緩やかに内湾するものと、少しきびれた後に胴部が膨らんで立ち上がるものがある。口縁部は内湾気味のものと若干外反するものがあり、また2つの山状突起をもつものもある。

文様要素：平行沈線文・爪形文・刺突文がある。

文様：口縁部下と胴部下半に平行沈線を2条ずつ横走させ、その中に爪形文を密に施文している。この平行沈線は胴部中間にもう2条横走することがある。さらに口縁部下の2条の平行沈線の間に竹管の背の部分で横長に刺突を巡らせている。平行沈線による区画内には、半截竹管による平行沈線文が5～6段、長さ6cm前後で施文される。平行沈線間の爪形文は幅広い間隔で浅く刻まれる段階もあり、その場合に施文される平行沈線は雜である。

地文：アナダラ属の貝殻を縫にロッキングさせて描く貝殻文が、器面全面に施文されるものがある。

◇浮島Ⅲ式

器形：前段階に引き続いて杯形土器が存在している。器形は底部より内湾気味に大きく開いて口縁部に至る茶碗のような形を呈するものと、ハの字を呈する底部から大きく外反して口縁部がほぼ直立するもの、高台部が大きく外反して胴部から口縁部にかけて緩やかに外反するものがある。

文様要素：平行沈線文・爪形文・貝殻文がある。

文様：前段階同様に平行沈線を2条ずつ横走させ、その中に爪形文を密に刻んだものが施文されるが、前段階よりも2条の間隔が狭まり、くっついている場合もある。また口縁部下と胴部下半に離れて施文されていたこの文様の間隔も狭まり、その区画内に施文されていた平行沈線文は消えている。胴部で最も下に施文された平行沈線から口唇部にかけての無文部が赤彩され、研磨される。諸職式土器は焼成後赤彩、浮島式土器は焼成前赤彩、とその技法が異なるため断定はできないが、赤彩はこの段階の特徴であり、併行する諸職b式（新）の影響であると考えられる。

地文：基本的にみられないが、浮島Ⅲ式同様に貝殻文が施文されることがある。

◇興津Ⅰ式

器形：台付鉢がある。口縁部は外反し、胸部は丸みをもってふくらみ、底部に至ってすぼまる。口縁部は波状のものがあり、波頂部外側には細長いつまみ状突起がつけられたり、あるいはその個所を小さく叉状に切り込んだりしたものがある。

文様要素：三角文・凹凸文・沈線文・貝殻文がある。

文様：口縁部を巡って幅1.5cm前後の整った縦の条線文が施文されることが多く、口唇部に細かい刻み目が施されることもある。条線文帯の下には竹管あるいはアナダラ属貝殻の腹縁の角を突き刺して抉るような手法をもって整った凹凸文が巡らされている。口縁部の条線文帯以下から腹部にかけて、アナダラ属貝殻の腹縁を弧を右に開いて押しつけ、その両端は笠描きの沈線で区画し、求める個所の貝殻文を磨消す。沈線文による意匠文は多く、全体が菱形・三角形などの組み合わせによる幾何学的構図で統一され、それに加えて弧線文や曲線文が配される。

地文：貝殻文が施文される。

◇興津Ⅱ式

器形：台付鉢がある。前段階の口縁部外反・胸部の丸みという特徴を持ちつつ、台部がくびれ、底部が反りながら末広がりになるという特徴が見える。口縁部は波状口縁のものがある。

文様要素：貝殻文・平行沈線文がある。

文様：台の無文部は磨かれる。幅広沈線文や垂直刺突貝殻文土器が施文され、口唇部には縱位条線帯をもつ。沈線文とそれに併走する貝殻腹縁文によって横位区画を描いたり、菱形文等の文様を描いたりする。貝殻文は刺突されることが多い。

地文：貝殻文が施文される。

・興津Ⅰ式・Ⅱ式の資料も少なく、まだ知られていない他の器形や特徴があると考えられる。

4. 分析

統いて、浅鉢を中心とした編年を再構成する中

で判明した各遺跡の様相を抽出し、台地ごとにまとめる。そして台地単位で比較し、大宮台地の地域性を考えたい（第2表）。

大宮台地は、選び出したほぼすべての遺跡で両型式の共伴が見られたが、どの遺跡の出土量も浮島式より諸磯式の方が多かった。諸磯式の中でも、特に諸磯a～b（古・中）式が主に出土していた。台地上の東側に遺跡が集中し、唯一タタラ山遺跡で諸磯式と浮島式の出土量が同程度であった。浅鉢は、諸磯a式が最も多く、諸磯式のみが出土している。また、土壙からは逆位で出土することが多かった。武藏野台地は、大宮台地同様に浮島式より諸磯式の出土量が多かったが、大宮台地よりも浮島式の出土量が多いと感じた。しかし、宇津木台遺跡や小山田遺跡群（報告書V）、稻荷丸北遺跡、多摩ニュータウン遺跡No.7からは浮島式が出土していなかった。これらの遺跡は多摩川沿いに位置しており、遺跡から出土する型式が諸磯a～b（中）頃に集中することから、多摩川沿いでは諸磯b式（中）段階まで浮島式文化圏の影響があまりなかったと言えるだろう。浅鉢は、住居跡と土壙の両方から諸磯b式が最も多く出土したが、諸磯a式段階も同じくらいの出土がみられた。また、大宮台地同様に土壙からは逆位で発見されることが多かった。大宮台地と異なる点は、赤彩された浅鉢が出土していること、浮島式の浅鉢が出土していることである。

赤彩された浅鉢は住居跡出土、土壙出土を問わず諸磯b式段階が多く、住居跡から出土した浮島式の浅鉢片はほぼ赤彩されていた。北白川下層式の赤彩された土器片もしばしばみられることから、交流の中心となっていたことが推測できる。

下総台地は、浮島式が中心に出土するものの、比較的どの遺跡でも諸磯式がみられた。浮島式へと繋がる諸磯a式の初期段階が多くみられ、諸磯c式は少数であった。また、出土遺跡は台地の西側に集中している。浅鉢は、住居跡から出土する

第2表 台地別遺跡出土状況（筆者作成）

報告書名	主体となる土器型式	浅鉢の出土場所			浅鉢の土壤出土状況			珠状耳飾り
		住居跡	土壌	その他・不明	正位	横位	逆位	
	諸 浮	諸 浮	諸 浮	諸 浮	諸 浮	諸 浮	諸 浮	石製土製
霞山貝塚	諸磯～諸磯b	2						
大谷場遺跡	諸磯a	2?	(2?)		1		1	
前原遺跡	諸磯		1				1	
中川貝塚	諸磯							1
宮本遺跡	諸磯b			14				
足利遺跡	諸磯							
丸ヶ崎遺跡	諸磯・浮島							
浮谷貝塚	諸磯							
大針貝塚	諸磯(・浮島)							
北宿遺跡	諸磯b・浮島 I?							
大谷口向原東遺跡	諸磯b(・興津)							
タラ山遺跡	浮島・諸磯b							
七社神社前遺跡(I)	諸磯b	10	3					
七社神社前遺跡(II)	諸磯a～b	77	4	65	3	2	6	1
七社神社前遺跡(Ⅲ)	諸磯(a～b)	16	1					2
本町田遺跡	諸磯a～b	3			3			
福荷丸北遺跡(Ⅲ)	諸磯a～b		4				1	
中台馬場崎貝塚	諸磯a							
宇津木台遺跡(1986)	諸磯a～c		2	1				
宇津木台遺跡 II(1983)	諸磯a～b	1	1	4			1	
小山田遺跡群V	諸磯a～b			47	1			1
小山田遺跡群 II	諸磯b			4				
鷺森遺跡	諸磯a～b	17	11	2				3
多摩ニュータウン遺跡 No.7	諸磯b		2				1	
加定地遺跡	浮島 I～II		7				3	
飯山満東遺跡	諸磯a～b・浮島	5	17	1?	2	3	2	2
長崎遺跡	諸磯b、(浮島 II)	6		1	9	1		
和良比遺跡	浮島 II～III、(諸磯b)	1	12		8			7
上台貝塚	諸磯b	2						
米島貝塚	諸磯(黒浜)			1				
花前 I 遺跡	諸磯(黒浜)	1						
花前 II -2 遺跡	諸磯a・浮島 I							
矢船遺跡	浮島(諸磯)						1	15
一本桜遺跡	北白川下層(諸磯)			2				1
五本松遺跡	浮島、(諸磯)							
復山谷遺跡	諸磯a～b		3				1	

* その他は包含層やグリッド一括出土など

ものは諸磯a式が多く、浮島式の浅鉢が住居跡から山上する例は和良比遺跡のみであった。両型式とも上層から出土しているが、諸磯式土器の方が多く、浮島式は加定地遺跡や飯山満東遺跡からの出土しかみられなかった。

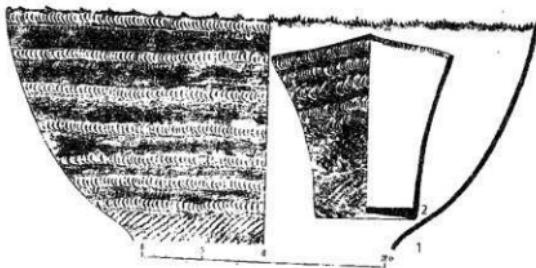
5. 参考事例

浅鉢は土壤やピットから発見されることが多く、墓の副葬品とする考えが主流である。筆者も

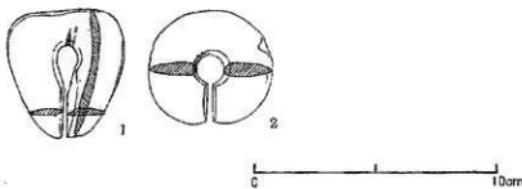
同様に考えているが、同時期における浅鉢の出土事例をいくつか挙げ、使用方法を考える上で参考したい。

5-1. 国府遺跡（濱田 1920、末永 1935、米田 2006、山口 2008）（第3図、第4図）

国府遺跡は大阪府藤井寺市に位置し、大正年間に縄文時代前期とされる人骨が多く発掘されている。その中で一対の珠状耳飾りを伴う例が6体、また抱石葬や妻被葬など副葬品を伴う例がある。

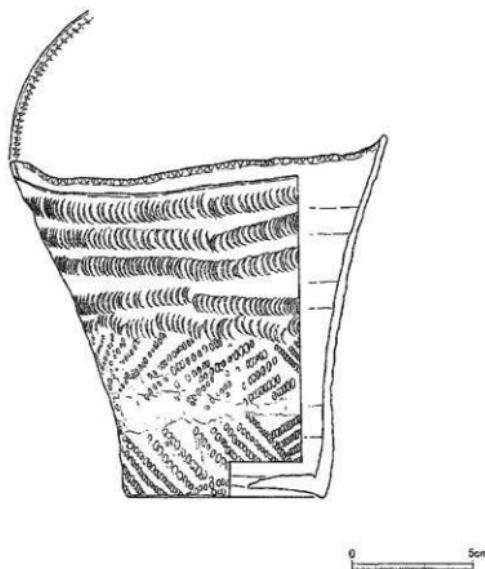


1 : 第 13 号人骨共伴 2 : 第 18 号人骨共伴

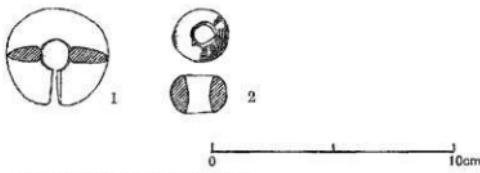


第 18 号人骨に共伴する块状耳飾り

第 3 図 国府遺跡出土例① (末永 1935 を改変)

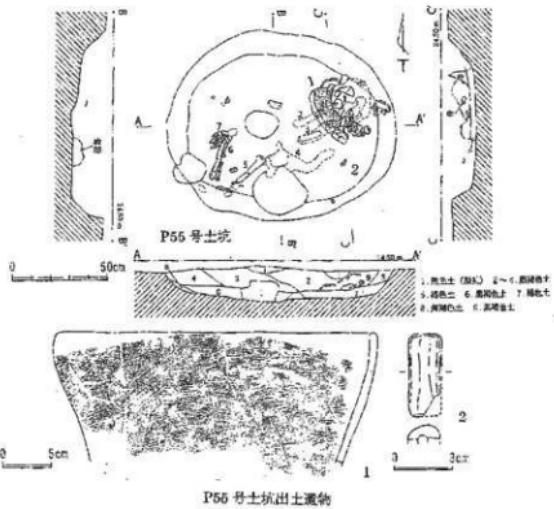


第18号人骨共伴の土器（底部穿孔がみられる）

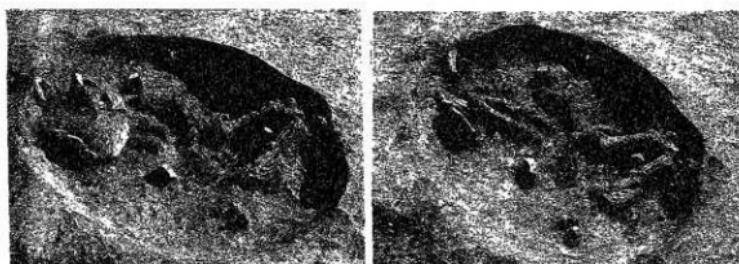


第13号人骨に共伴する块状耳飾り

第4図 国府遺跡出土例②（末永 1935、山口 2008 を改変）



P55 号土坑出土遺物



第5図 北川貝塚出土例（公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団理蔵文化財センター提供）

特に大串第18号人骨は仰臥屈葬で、胸の上に底部に穿孔を施した鉢型土器を横倒しで乗せ、耳があったと思われる場所から玦状耳飾り（蛇紋岩と思われる石材製と軟玉製）が出土している。頭部に10片の縄文土器片を乗せ、長幅20数cmほどの白石が胸部左右にあり、出土状況写真から墓壙と思われるくぼみも確認された。出土人骨は、成人男性の可能性が高いとされている。また第13号人骨は、人骨の周囲に礫や石塊をめぐらせ、玉質の玦状耳飾り1点と装身具と思われる小玉1点が伴出し、頭部に大型浅鉢を被せた状態で出土している。これらの土器は北白川下層式とされている。

5-2. 北川貝塚（坂本他 2007）（第5図）

北川貝塚は神奈川県横浜市都筑区に所在する遺跡で、4基（4点）から縄文土器の大破片が出土、7基（8点）から完形土器が逆位で出土、そして1基から仰臥屈葬した年齢性別不詳の人骨とその人骨頭部に被せられた土器片と滑石製簪玉半欠が出土した。この土器は諸磯b式で、底部を欠損している。逆位で出土した土器の中には玦状耳飾りが2分されたものや、礫が伴出するものもあった。

国府遺跡や北川貝塚の例は、「墓壙に副葬品として浅鉢を用いる」という浅鉢の使用方法を肯定する証拠のひとつと言えるだろう。

諸磯式土器文化圏では、小杉が埼玉県東光寺遺跡7号住居跡から木葉文の施文された諸磯式の深鉢が焼土に接して出土した例、長野県丸山遺跡2号土坑から木葉文が施文された諸磯式土器と河原石、17号土壙から木葉文が施文された大小2つの諸磯式土器が出土した例を挙げ、埼玉県の例はその住居を廃絶する際にある種の「廃居儀礼」をした可能性があると述べ、長野県の例は「葬送儀礼」を行った可能性があると述べている（小杉 1985）。

また金井は、諸磯a式後半～b式後半にかけての浅鉢は住居跡からも発見されるが、ほとんどが土壙から出土しており、完品で1～2個出土することが多く、完品が出土した土壙には人骨が伴う場合があり、それは上壙墓と言えると述べている。また、鰐付彩文浅鉢は埋葬に関連する納骨具、あるいは副葬品と考えられ、出土状況や特異な器形・文様から、埋葬に使用するマジカルな供え物の要素もあるのではないか、と推測している（金井 1979）。

今回筆者が収集した諸磯式土器文化圏での浅鉢出土事例をまとめると、①土壙からの出土例が多い、②赤彩されるものがある、③土壙から発見されるものは完品に近いものが多い、④浅鉢と共に玦状耳飾りや河原石、深鉢の人形片が出土する、という4点が挙げられる。先程挙げた浅鉢使用例を加えて考えると、今回収集した事例の多くは土壙として機能し、副葬品として浅鉢が使用されたといえるだろう。

浮島式土器文化圏では、永島正春が木戸先遣跡の赤彩技術について、赤彩された浮島式土器の破片を分析し、焼成前赤彩だと指摘した（永島 1994）。

今橋は、浮島式分布圏において深鉢以外は諸磯式系土器を利用した例が多く、深鉢以外の器種の多くを諸磯式に依存し、共存していたのではないかと推測している（今橋 1991）。

古内氏は、飯山満東遺跡において、出土した浅鉢と考えられる土器44点の内6点以外全て完形であること、42点が上壙から出土していること、集中的に検出された土壙は一括土器及び玉類の出土から墓址と考えられることを述べている。また、土壙内から出土した上半部を意図的に粉碎した深鉢について、浅鉢の代用品として転化させたのではないかと推測している（古内 1986）。

浮島式土器文化圏での浅鉢使用例をまとめる
と①土壙からの出土が多い、②完形であることが

多い、③焼成前赤彩で、明瞭な赤彩を施すことが多い、④諸磯式土器の鉢類を使用することがある、という4点が挙げられる。

今回分析対象とした遺跡において、上墳や堅穴住居跡から北白川下層式の土器片が数点出土している。それらはほぼ赤彩され、北白川下層式土器圈との交流によってもたらされたものと思われる。また、北白川下層式はベンガラによる焼成前赤彩の施された土器が出土することがある。諸磯式との交流による焼成後赤彩が施された搬入土器が広く知られるが、焼成前赤彩の施された諸磯式土器がわずかに出土した例があることから、諸磯式を介した北白川下層式と浮島式の関連が考えられる。

まとめ

分析結果から、諸磯式期における大宮台地上では諸磯a～b式（古・中）段階に最も人がいたと言えるだろう。タタラ山遺跡の出土状況から考えると、諸磯b式や浮島II～III式段階に浮島式土器圈からの進出、または何らかの積極的な働きかけがあったと思われる。浅鉢の編年表からも分かるように、浮島式初期段階では諸磯a式の浅鉢を用いていたが、浮島II式段階になると深鉢をそのまま小さくしたような浮島式独白の浅鉢が出現する。そして諸磯b式（中）段階と浮島III式段階において土器に赤彩が施されるようになる。

この赤彩は、諸磯式土器の赤彩が影響していると考えられる。しかしその方法は異なることが推測される。赤彩に用いる材料が入手できる周辺環境が異なることや、諸磯式土器を模倣した土器を製作する北白川下層式も浮島式同様に焼成前赤彩をするなど、赤彩方法が異なる原因については今後の課題である。

以前から浅鉢は、小彩率が高いことから非日常の道具として考えられてきた。浅鉢の多くは土壇から出土し、国府遺跡や北川貝塚の例のように块

状耳飾りが共伴したり、人骨に伴う例もあることから、埋葬や葬儀に関する呪術的なもの、あるいは副葬品としての見方が主流である。今回分析した遺跡に人骨が発見された例はないが、块状耳飾りや深鉢の大形片が浅鉢に共伴した例がいくつあることを考慮すると、浅鉢が副葬品だという考えは、大半が肯定できるだろう。国府遺跡や北川貝塚の例からすると、浅鉢は基本的に逆位で頭に被せていたようだ。しかし住居跡からも同量程度の浅鉢が出土しており、土壤からも補修孔があげられた浅鉢が出土していることから、副葬品だけではない使用法があることが明確になった。住居内での使用法は分からぬが、赤彩を施した威信財として他の遺跡との交流に用いるなど、交換や模倣、持ち込みなどによって流通が多く、当時の社会において重視されていた器種であることは確かである。

土壇で浅鉢に共伴するように見える深鉢の大形破片は、それのみが土壇から出土する例もあり、必ずしも共伴するものではないらしい。今回は浅鉢中心の分析に終始したため、深鉢が共伴する法則は分からなかった。また、今回の分析では块状耳飾りを扱わなかったが、諸磯式文化圏では石製品が多く、浮島式文化圏では土製品が多かったことが気になった。副葬品として浅鉢との関係が深いであろう块状耳飾りについても、今後の課題したい。

今回の分析・考察から、大宮台地は諸磯式でも初期の頃に多くの人口をかかえ、土壇に浅鉢を副葬するという文化をもち、諸磯b式（中）段階まで諸磯式土器文化圏の中核地の一つであった、という地域性がみえた。大宮・武藏野・下総の三台地における縄文時代前期後半は、文様構造の異なる二つの型式へと土器の分化を進めつつも深い交流関係を保ち続け、赤彩方法の違いはあるが、浅鉢を土壇に埋葬するという共通の要素を持っていた。

今回は浅鉢に関する分析が中心となったが、浅鉢が出土する土壌の形状や住居跡と浅鉢の関係、そして北白川下層式・諸儀式・浮島式の交流、块状耳飾りなどの他の副葬品について等、分析が及ばなかった新たな課題が多く残る。資料の増加を待ちつつ今後も分析を続けたい。

本論をまとめるにあたり、七社社前遺跡の遺

物を調査させていただいた北区飛鳥山博物館の鈴木直人氏、多くの助言をくださった阿部芳郎教授、勉強会を開いてくれた同級生や先輩方に對し、深い感謝の意を表し、本論の結びとする。

引用・参考文献

- 青木義脩他 1967 「第一第2・3次調査—大谷場貝塚・ツ木遺跡」南浦和地区埋蔵文化財発掘調査報告書第2集
浦和市文化財調査委員会
- 青木義脩他 1968 「昭和42年度調査—大谷場貝塚・ツ木遺跡」南浦和地区埋蔵文化財発掘調査報告書第3集
浦和市文化財調査委員会
- 青木義脩他 1985 「北宿遺跡発掘調査報告書—浦和市立病院総合化に伴う埋蔵文化財発掘調査2—」浦和市遺跡調査報告書第54集 浦和市遺跡調査会
- 秋元一大他 1985 「流山市遺跡調査会報告 千葉市流山市 長崎遺跡」流山市遺跡調査会
- 麻生 優・白石浩之 1986 「第五章 繩文時代前期」『繩文土器の知識 I 草創・早・前期』考古学シリーズ14 東京美術
- 板橋区教育委員会 1982 「中台馬場崎貝塚B地点 予備調査報告書」文化財シリーズ第41集
- 今橋浩一 1991 「縄文時代前期後半の文化動向—東部関東浮島式土器分布圏における異系統土器との共存関係—」『古代探窓—早稲田大学考古学会創立40周年記念考古学論集』早稲田大学出版部
- 今村啓爾 1977a 「称名寺式土器の研究(上)」『考古学雑誌』日本考古学会
- 今村啓爾 1977b 「称名寺式土器の研究(下)」『考古学雑誌』日本考古学会
- 今村啓爾 1981 「施文順序から見た諸儀式土器の変遷」『考古学研究』第27卷4号 考古学研究会
- 今村啓爾 1982 「諸儀式土器」『縄文文化の研究』3 雄山閣
- 今村啓爾 1983 「文様の割りつけと文様帶」『縄文文化の研究』雄山閣
- 今村啓爾 2000 「諸儀式の正しい編年」『上層考古学』第24号 土曜考古学研究会
- 浦和市遺跡調査会 1993 「宮本遺跡発掘調査報告書」浦和市遺跡調査会報告書第165集
- 近江 哲 2012 「歎息の突起の変遷—諸儀式における文様との相関性から—」『千葉大学文学部考古学研究室30周年記念 考古学論叢—岡本東三先生追憶とともに—』六一書房
- 大宮市遺跡調査会 1998 「中川貝塚—第3次調査—」大宮市遺跡調査会報告第63集
- 小山田遺跡調査会 1983 「東京都町田市 小山田遺跡群II 昭和53年度調査遺跡の報告」
- 小山田遺跡調査会 1984 「東京都町田市 小山田遺跡群V 昭和54・55年度調査遺跡の報告」
- 金井正三 1979 「縄文前期の特殊浅鉢について」『候潮』第31卷第4号 信濃史学会
- 可児道公 1991 「縄文人の生活様式を探る—土器による領域論へのアプローチは可能か—」『研究論集 創立10周年記念論文集』X 東京都埋蔵文化財センター
- 耳吹 堅 1989 「浮島・興津式土器様式」『縄文土器大觀 草創期・早期・前期』I (著) 小林達雄・小川忠博 小学館
- 久保常晴他 1969 「本町田」 ニューサイエンス社
- 黒済和彦編 1988 「七社社前遺跡I」 東京都北区教育委員会
- 小杉 康 1985 「木の葉文浅鉢形土器の行方—土器の交換形態の一様相—」『季刊考古学』第12号 雄山閣

- 小杉 康 1988 「搬入土器に関する問題—模倣木の葉文浅鉢形土器の搬入—」『七社神社前遺跡』 東京都北区教育委員会
- 小林達雄他 1965 「米島貝塚、庄和町文化財調査報告第1集 庄和町教育委員会
- 小林行雄 1933 「先史考古学に於ける様式問題」『考古学』第4卷8号
- 埼玉県立博物館 1990 『大針貝塚・浮谷貝塚』
- さいたま市遺跡調査会 2002 『大谷口向原南遺跡(第3次)・大谷口向原東遺跡・大谷口向原遺跡(第2次)』 さいたま市遺跡調査会報告書第6集
- さいたま市遺跡調査会 2012 『九ヶ崎遺跡群-Ⅲ-[A-147 遺跡(第2次)]』 さいたま市遺跡調査会報告書第124集
- 坂本 彰他 2007 『港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告39 北川貝塚』 横浜市教育委員会
- 佐々木藤雄 1993 『西原遺跡 東京都板橋区西原遺跡発掘調査報告書』 西原遺跡調査会
- 菅森健一他 1987 『鷺森遺跡の調査』 地上資料第33集 上福岡市教育委員会
- 佐藤傳蔵 1894 「常陸國浮島村貝塚探査報告(閔入)」『東京人類學會雜誌』第10卷第105号 東京人類學會
- 白岡町教育委員会 1996 『タラ山遺跡(第3地点)』町内追跡発掘調査報告書V
- 鈴木公雄 1964 「土器型式の認定方法としてのセットの意義」『考古学手帳』21
- 鈴木敏昭他 1980 『久喜市埋蔵文化財調査報告書 足利遺跡』久喜市教育委員会
- 鈴木徳雄 1979 「諸磯式土器文様の変遷について」『白石城』埼玉県遺跡調査会
- 鈴木徳雄 1989 「諸磯a式土器研究史(1) 一型式論的研究の基本的問題を探るー」『上野考古』第13号 上野考古学研究会
- 鈴木徳雄 1994 「諸磯a式の文様帯と施文域—文様帯の生成と変容—」『縄文時代』第5号 縄文時代文化研究会
- 鈴木徳雄 1996 「諸磯b式の変化と型式間交渉—文様変化の繋起の累積性と型式間関係の諸相—」『縄文時代』第7号 縄文時代文化研究会
- 清藤一順他 1975 『飯山満東遺跡』千葉県都市公社
- 関根慎二 1986 『糸井宮前遺跡』関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第14集 群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 関根慎二 2008 「諸磯式土器」『小林達雄先生古稀記念企画 総覧 縄文土器』(編) 小林達雄 アム・プロモーション
- 世田谷区教育委員会 2011 『稻荷丸北遺跡Ⅲ 東京都世田谷区上野毛3丁目9番の発掘調査記録』 稲荷丸北遺跡第3次調査会
- 高野博光 1973 「大宮台地における浮島式土器の様相—とくに見沼周辺の資料より—」『埼玉考古』第11号 埼玉考古学会
- 谷井 広 1972 「列孔台付浅鉢形土器について」『埼玉考古』第10号 埼玉県考古学会
- 谷川盤雄 1924a 「諸磯式七器の研究」『考古學雑誌』第14卷第9号 考古學會
- 谷川盤雄 1924b 「諸磯式土器の研究(一)」『考古學雑誌』第14卷第11号 考古學會
- 谷川盤雄 1925a 「諸磯式土器の研究(二)」『考古學雑誌』第15卷第1号 考古學會
- 谷川盤雄 1925b 「武藏國橋樹郡箕輪貝塚發掘報告(「諸磯式土器の研究四」)」『考古學雑誌』第15卷第3号 考古學會
- 谷川盤雄 1925c 「武藏國橋樹郡箕輪貝塚發掘報告(二)(「諸磯式土器の研究四」)」『考古學雑誌』第15卷第9号 考古學會
- 谷川盤雄 1926 「武藏國橋樹郡箕輪貝塚發掘報告(三)(「諸磯式土器の研究五」)」『考古學雑誌』第16卷第4号 考古學會
- 谷口康浩 1989 「諸磯式土器様式」『縄文七部大觀 草創期・早期・前期』1 小学館

- 千葉県文化財センター 1976 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書V』
- 千葉県文化財センター 1978 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書VI』
- 千葉県文化財センター 1984 『常盤自動車道埋蔵文化財調査報告書II—花前I・中山新田II・中山新田III—』
千葉県文化財センター・日本道路公団東京第一建設局
- 千葉県文化財センター 1985 『常盤自動車道埋蔵文化財調査報告書III—花前II-1・花前II-2・矢船I』
千葉県文化財センター・日本道路公団東京第一建設局
- 寺内博之他 1984 『成田市郷部北遺跡群調査概要(加定地・殿台遺跡)』成田市郷部北遺跡調査会
- 東京都埋蔵文化財センター 1999 『多摩ニュータウンNo.753遺跡I』東京都埋蔵文化財センター調査報告第75集
- 東京都埋蔵文化財センター 2008 『北区 七社神社前遺跡一暨視察単独待機宿舎泡野川警察署泡野川寮改築工事に伴う調査I』東京都埋蔵文化財センター調査報告第221集
- 中島広顕他 1998 『七社神社前遺跡II』北区埋蔵文化財調査報告第24集 東京都北区教育委員会
- 永島正春 1994 『縄文時代前期(木戸先遺跡)の赤彩技術について』千葉県四街道市木戸先遺跡御成台団地宅地造成事業地内埋蔵文化財調査 財団法人印旛都市文化財センター
- 中西光他 1983 『宇津木台遺跡群II』1981年度発掘調査報告書(1) 八王子市宇津木台地区遺跡調査会
- 中山吉秀 1974 『一本桜遺跡』千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書II 千葉県都市公社
- 中山吉秀 1985 『房総における縄文時代前期後半の様相—特に諸種式上器と浮島式上器の比較から見て—』『古代』第80号 早稲田大学考古学会
- 橋木弘子 1991 『千葉県四街道市和良比遺跡発掘調査報告書II』財団法人印旛都市文化センター発掘調査報告書第43集 財団法人印旛都市文化センター
- 西村正衛 1966 『茨城県稻敷郡浮島貝塚貝塚一東部関東における縄文前期後半の文化研究、その一』『學術研究—人文科学・社会科学篇第十五号』早稲田大学教育学部
- 西村正衛 1968 『茨城県稻敷郡興津貝塚(第一次調査)一東部関東における縄文前期後半の文化研究一』『學術研究—人文科学・社会科学篇第十七号』早稲田大学教育学部
- 橋本勝雄 1989 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書IX』千葉県文化財センター調査報告第163集
- 八王子市宇津木台地区遺跡調査会 1986 『宇津木台遺跡群VII』1982年度発掘調査報告書(2)
- 羽生淳子 1987 『諸種b式土器』『季刊考古学』第21号 雄山閣
- 濱田耕作他 1920 『河内国府石器時代遺跡第二回発掘報告』『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第4冊
京都帝國大學
- 星間孝次他 1971 『瀬訪山貝塚・瀬訪山遺跡・桜塚貝塚・南遺跡発掘調査報告書』埼玉県遺跡調査会報告第8集
埼玉県遺跡調査会
- 古内 茂 1986 『浅鉢形土器出現の背景—飯山満東遺跡を中心として—』『千葉県文化財センター研究紀要10
—千葉県文化財センター10周年記念論集—』千葉県文化財センター
- 細田 勝 1996 『縄文前期終末土器群の研究—地域差と系統差の統合的解釈に向けて—』『先史考古学研究』第6号
阿佐ヶ谷先史学研究会
- 細田 勝 2002 『諸種式土器の変遷過程』『埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』17号
- 堀越正行 1988 『上台貝塚』市立市川考古博物館研究調査報告第4冊 市立市川考古博物館
- 末木 健 1999 『縄文時代大型浅鉢について』『山梨県考古学論集IV—山梨県考古学協会20周年記念論文集』山梨県考古学協会
- 松田光太郎 1992 『浮島式上器の成立について—東関東における縄文時代前期後半の土器文様の伝統—』『古代』第93号 早稲田大学考古学会
- 松田光太郎 1993 『諸種a式土器の文様とその変遷』『古代文化』第45巻6号 古代学協会
- 松田光太郎 1995 『浮島式土器の研究』『古代探叢・演』I宏先生追悼考古学論集一 IV 早稲田大学出版部

- 松田光太郎 1996 「興津式の分類とその変遷」『神奈川考古一神奈川考古同人会 20 周年記念論集一』第 32 号
神奈川考古同人会
- 松田光太郎 1997 「縄文時代前期における文化圏の変化と集団の移動—関東地方の浮島・興津式文化圏に関して—」
『考古学研究』第 43 卷第 4 号 考古学研究会
- 松田光太郎 2007a 「獸面把手の変遷とその地域性—縄文時代前期の関東地方西部の諸磯 b 式土器を事例として—」
『縄文時代』第 18 号 縄文時代文化研究会
- 松田光太郎 2007b 「縄文時代前期後葉の関東地方東部と西部の土器群の関係—浮島式・興津式土器と諸磯式土器
の間の交流—」『縄文社会の変動を読み解く 予稿集』縄文時代をめぐるシンポジウム V
縄紋社会研究会・早稲田大学先史考古学研究所
- 松田光太郎 2008a 「諸磯・浮島式土器の変遷と型式間の影響關係」『神奈川考古』第 44 号 神奈川考古同人会
- 松田光太郎 2008b 「浮島式・興津式土器」小林達雄先生古稀記念企画 総覽 縄文土器 (編) 小林達雄
アム・プロモーション
- 末永雅雄 1935 「富民協会 農業博物館 本山考古室要録」図書院
- 宮代町教育委員会 1983 「前原遺跡・宮代町文化財調査報告書第一集
- 山口卓也 2008 「関西大学博物館所蔵の重要な文化財「縄文鉢形土器」の穿孔について」『関西大学博物館紀要
第 14 号』関西大学博物館 <http://hdl.handle.net/10112/2317>
- 山内清男 1939 「日本考古之文化」先史考古學會
- 山内清男 1967a 「諸磯式」『日本先史上器図譜 第一部 関東地方 1 ~ 邪集』(1939 ~ 1941) 先史考古学会
- 山内清男 1967b 「縄文上器型式の細別と大別」『先史考古学論文集』第 1 冊 先史考古学会
- 山村貴輝 1994 「土器様式と縄文時代の地域圖」『季刊 考古学』第 48 号
- 米田文孝 2006 「河内国府遺跡の意義と遺物」『Occasional paper No.2 地域連携企画第 1 弹 河内国府遺跡里帰り
展』関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター <http://hdl.handle.net/10112/2895>
- 若林勝邦・八木栄三郎 1897 「相州諸磯石器時代遺跡の土器」『東京人類學會雑誌』第 13 卷 第 139 号
東京人類學會
- 和田 哲 1973 「浮島系土器の諸問題」『古和田台遺跡 縄文前期集落址発掘調査報告』船橋市教育委員会・古和
田台遺跡調査同
- 和田 哲 2006 「浮島貝ケ窪貝塚—山内清男調査資料とその意義—」『坂詫秀一先生古稀記念論集考古学の諸相 II』
近出版

研究紀要 第30号

—設立35周年記念—

2016

平成28年3月14日 印刷

平成28年3月18日 発行

発行 公益財團法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 熊谷市駒木台4丁目4番地1

<http://www.saimabun.or.jp>

電話 0493-39-3955

印刷 朝日印刷工業株式会社